

更新世末の大形獣の絶滅と人類

Relationship between the Extinction of the Big Mammals and the Human Activities at the Late Pleistocene in Japan

春成秀爾

はじめに

- ①ニホンジカとイノシシの起源
- ②更新世後期の動物相
- ③旧石器人の狩猟と大形獣の絶滅

【論文要旨】

「日本の旧石器人」は、ナウマンゾウ・ヤベオオツノジカ・ステップバイソン（野牛）などを狩りの対象にしていた。しかし、これらの大形獣は自然環境の変化によって、あるいは、人によるオーバーキル（殺し過ぎ）の結果、更新世の終わりごろに相ついで絶滅した。完新世になると、代わってニホンジカとイノシシが繁殖したので、縄文人はこれらの中形獣を弓矢で狩りした。長野県野尻湖の発掘の成果を総括する形で現在、このような考え方が学界で広く受け入れられようとしている。しかし、この考え方に関する資料や検討はまだ十分でなく、一つの仮説にとどまる。

ナイフ形石器・剥片などが集中的に分布するブロック（径4～6m）がいくつも環状（径20～50m）にめぐる規模の大きな旧石器時代後期の遺跡があり、大形獣を狩猟するために人々が一時的にたくさん集まった跡と解釈されている。このような遺跡は約33,000～28,000年前に限ってみられる。また、大形動物の解体具と推定される刃部磨製石斧もこの時期に多い。ナウマンゾウやオオツノジカを狩っていたのは、28,000年前ごろまでで、以後もそれらの大形獣は生存していたとしても、その数は著しく減少しており、寒冷期がまだつづいている15,000年前ごろにはこれらの大形獣はほぼ絶滅してしまったようである。それをオーバーキルの結果だと主張するためには、狩猟の対象とは考えにくい猛獣のトラ・ヒョウなどや、大量にいた食虫類のニホンモグラジネズミや齧歯類のニホンムカシハタネズミ・プラントハタネズミなどが、同じころに絶滅している事実との違いを適切に説明しなければならない。大形獣の絶滅問題に関しては、オーバーキルだけでなく、更新世後期の気候の細かな変化や火山灰の降下に起因する自然環境の変化との関連をいっそう追究する必要がある。